

## 学 位 論 文 要 旨

学位論文題目 明治期山口県域における近代産業の勃興と地方企業家

申請者氏名 島 中 茂 朗

本研究の目的は、明治維新以降のわが国が資本主義的な経済発展を遂げ工業化していく過程で、西洋から移植された近代産業に着目し、近代産業の担い手となる企業家の果たした役割を通じて、近代産業が地方においてどの様に受容され、定着していったかを山口県域を事例として明らかにしていくことにある。対象とする時期は近代産業がわが国に移植された近代移行期から検討を始め、数度にわたる企業勃興を経験した明治期を主な研究の対象とする。また、考察にあたっては、旧武士層の動向に注目していくことにする。

まず、第 1 章では、近代移行期からの山口県域の経済状況を考察している。近世のプロト工業化の段階では、全国的にも進んでいた長州経済が、近代化が進展していく中で次第に取り残されていった。特に第 1 章ではプロト工業化の挫折と近代工業との断然を強調している。しかし、山口県下でも「初期的企業勃興」を確認することができ、着実に近代産業が勃興しつつある様子を明らかにすることができた。

第 2 章では、明治初年から 1880 年代前半頃にかけての近代移行期において、士族によって設立・運営された士族授産企業が如何にして創業資金を調達し、どのような経営形態を構築したかを、山口県域で設立された個別の士族授産企業の事例から考察することにある。その際、当該期の地方において形成された企業組織の中でも、合本形式(株式会社形態の企業)に着目して明らかにしていく。本章で取り上げた士族授産企業は、木綿聚社、第百三国立銀行、第百十国立銀行、殖鱗社、豊浦士族就産義社、セメント製造会社(小野田セメント)の各社である。

第 3 章では、旧長州藩士笠井順八の企業家活動の解明を目指した章である。笠井は第 2 章でも取り上げたセメント製造会社(小野田セメント)の創業者として知られている人物である。笠井が創業した小野田セメントについては、創業の経緯から資金調達の過程を追いつつ、笠井が同社の経営危機で退陣するまでを考察した。笠井は小野田セメントにとどまらず地元の小野田銀行の頭取や小野田軽便鉄道の経営にも参画していた。本章では、笠井という地方企業家の存在が、これら近代企業を通じて地域経済にどのような影響を与えたの



かという地域の発展といった視点からも考察を加えた。

第4章は、明治期の山口県域で笠井以上の企業家活動を展開した、旧長府藩士の豊永長吉を取り上げた章である。事業資金の捻出の経緯から、藩政時代の人脈を活用した赤間関米商会所の設立を考察し、豊永が地方企業家としてどの様に成長を遂げていったかを丹念に追っていった。笠井は明治政府の井上馨との繋がりがあったが、豊永については取り分け品川弥二郎との関係が、豊永の事業展開に大きな影響を与えていた。こうした明治政府高官と地方企業家との関連が指摘できるのも、明治維新の震源地となった山口県域の特色の一つである。

第5章では、豊永長吉が設立に関与した近代産業の中でも、最も重要な日本舎密製造会社の事業展開を考察した章である。同社は品川からの示唆と側面からの支援で豊永が設立することになった化学企業である。同社はわが国ではじめてとなる酸・アルカリを同時に製造できる工程を有した工場を建設した化学企業で、工場は笠井の勸奨もあって小野田セメントに隣接して建てられた。創業者の豊永は1892年から1911年に亡くなるまで同社の社長を務め、経営の陣頭指揮に当たったが、本章では特に豊永在職中の株主総会を取り上げて、豊永の経営への関与をより具体的に浮き彫りにしている。

終章では、明治前半期に旧武士層が山口県域の近代化のために果たした役割の再評価を試みた後で、本研究で取り上げた旧武士出身の地方企業家である笠井順八と豊永長吉の比較を行っている。明治維新後に県の官吏から企業家となった笠井と官途に就くことなく企業家として歩んでいった豊永とを比較することで、旧武士層出身である地方企業家の性格の違いを検討し、その類型化を試みた。そして、今後の展望として山口県域では、明治後期から大正期になると東京や大阪などの都市部からの企業の進出が見られるようになり、旧武士層を主体とした自立的工業化にかわって、次第に県外資本によって工場地帯が形成されていくことを述べた。しかし、山口県域でも特異な事例である宇部地域の解明は今後の課題とした。



## 学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲 第 102号	氏 名	島中 茂朗
論文題目	明治期山口県域における近代産業の勃興と地方企業家		
<b>(論文審査概要)</b>			
<p>本研究は、明治期の山口県地域において、旧武士出身の地方企業家が近代産業（特に近代工業）の導入・確立に主導的役割を果たしたことを明らかにした研究である。山口県の前身である近世期の防長地域は、農村手工業によって全国的に見ても高度にプロト工業化が進展していたが、明治期には一転して近代化の流れから取り残され、近代工業への動きは停滞することになった。しかし、一部では近代工業に挑戦し成功する動きも見られ、その担い手になったのが旧武士出身の企業家であったというのが山口県の特徴であった。本研究では、旧武士の知識人階級としての素養などに注目した旧来の研究史の指摘する要因に加えて、長州藩閥政府要人や旧藩主家との関係、県の士族授産政策、農商資本の動向などの地域独自の要因を挙げて、山口県で旧武士出身の企業家が近代産業の担い手になったことを明らかにしている（第1章、第2章）。</p> <p>こうした山口県における旧武士出身の企業家の中でも、近代工業の創業に大きく貢献した代表的存在として取り上げられているのが、小野田セメントの創業者・笠井順八（旧萩藩士族）と、先駆的な化学工業会社であった日本舎密製造の創業者・豊永長吉（旧長府藩士）である。</p> <p>第3章で取り上げた笠井順八と小野田セメントについては、従来から研究史の蓄積の豊富な事例であるが、地方における産業革命の進展について取り上げた中村尚史の研究などを踏まえて、その再評価を試みている。この事例研究では、その創業過程において工部省などの長州藩閥政府要人との関係が技術面で大きく寄与していたことや、県の士族授産政策との関係など、山口県独自の士族企業発展の要素を明らかにするとともに、その後の企業家笠井順八の性格変容についても論じている。すなわち、小野田セメントが一地方企業から全国的企業へと発展していく過程で、同社は地域に密着した士族授産企業としての性格を次第に喪失し、創業者であった笠井順八も経営能力の限界から退陣を余儀なくされた。筆者はこれを中村尚史の言う「地方の時代（地方企業家が主体性を持って地元資本で産業化を進める時代）」から「都市の時代（中央資本が産業化の中心になる時代）」への移行を反映したものであると位置づけている。ただ、笠井は小野田セメントの経営から退陣後も、小野田銀行や小野田軽便鉄道といった地域経済振興を目的とした企業家活動を継続して行っており、「都市の時代」になってもなお、地方企業家による地域に密着した経済活動は存続していたというのも筆者の主張である。</p> <p>一方、第4章・第5章で取り上げられた豊永長吉と日本舎密製造については、従来、ほとんど知られることのなかった地方企業家の事例研究であり、筆者が長年にわたって史料を発掘し実態解明に努めてきた本研究の中でも極めて学術的価値が高く貴重な研究成果といえる。旧長府藩士であった豊永長吉は、旧藩主長府毛利家から藩営事業を委託されたことを契機に実業家に転身し、同藩の士族授産事業への関与や、藩役人時代に培った人脈を背景に赤間関米商会所頭取を勤めるなど、下関地域における指導的企業家の地歩を固めていった。豊永はその後、門司築港会社への参画によって、中央資本を呼び込むことで地方でも大事業を実現しうることを経験し、同様の資本調達方式で日本初の総合的無機化学工場となる日本舎密製造（当初は本社は東京、工場を小野田に設置）を創業することになる。この創業に際しては、宮内省御料局（官営の化学工場であった旧印刷局を所管）長官であった萩藩出身の品川弥二郎および旧印刷局関係技術者の協力・関与が大きく、この点は小野田セメント創業との類似点がある。筆者は、長府藩の士族授産事業などを通じて地方における指導的企業家の地位を確立した豊永が、最終的には中央資本を糾合しうる企業家へと成長したものと位置づけており、同じく旧武士出身で近代工業を興した笠井順八とは異なる地方企業家の類型が存在したことを論じている。</p>			



1, 創造性

・創造性の点においては達成できている。

研究蓄積が必ずしも豊富ではなかった明治期山口県の近代産業の生成過程について地方企業家に着目して取り上げ、従来は漠然と指摘されるに過ぎなかった山口県における旧武士層主体の工業化の動きについて、新たな史実を掘り起こしつつ、その因果関係も含めて詳しく実証している。山口県の地方史研究の深化という面では貴重な事例研究として一定の学術的価値を有すると考えられる。しかし、経済史・経営史の研究分野に対する貢献は、以下のような理由から、一地方の新たな事例を提示したという評価に止まらざるを得ない。まず、山口県の実態解明に力点を置きすぎるあまり、他地域との比較や日本全体での位置づけに関しては不十分で、広い視野で分析対象を位置づけることが必要である。また、研究史の枠組みに依拠して山口県の地方企業家を分析しようとする試みも、いくつか注目すべき論点を打ち出しているが、概して形式的で考察が浅く、貴重な実証を活かし切れていないのが残念である。

2, 論理性

・論理性の点においては達成できている。

歴史分野の研究として不可欠な、一次史料の広範な収集、厳格な史料分析によって手堅い実証がなされている。また、明らかにした史実を研究史の中で位置づけ、その意義や背景を考察して結論を導き出すことも一定程度はできている。しかし、その手堅い実証分析とは対照的に、抽象的な概念説明が稚拙であったり、根拠を十分に示さず推測によって論を展開しようとしたりする場合が散見される。また、本研究の主題・問題関心が筆者の中で微妙にぶれている場合もあり、これらが結果的に、主張・結論が不明瞭になってしまったり、考察が浅くなったりすることにつながっている。この点は筆者の今後の最大の課題であろう。

3, 厳格性

・厳格性の点においては達成できている。

全国的な経済史・経営史の先行研究について、幅広い知識を有するものの、その理解が浅い場合も多く、自分の研究とどの様に関連づけ分析するかという大局的な思考力も未熟である。しかし、研究手法の面では、精力的に広範な史料収集を行い、その分析によって新たな史実を見出すという手堅い実証的手法は確立されている。

全体の評価

以上の諸点を総合的に見て、学位論文全体としては、望まれる水準に達成できていると判断し、論文審査を合と判定した。

論文審査結果

合・否

審査委員 主 査 (氏名) 木部 和昭

(氏名) 仲間 瑞樹

(氏名) 古畑 大介